

「栃窪」から考える豊かな暮らし

法学部国際ビジネス法学科3年 赤木 萌絵

私は現在、「立教×栃窪プロジェクト」という団体で、新潟県南魚沼市栃窪地区をフィールドに学生9名で「持続可能な社会とは何か」という問いをテーマに農村部と都市部の共存を目標に活動しています。

この活動を始めたきっかけは、2015年度秋学期に全力で開講された立教サービスマーケティング「RSL-2」を履修したことです。「RSL-2」では日本有数の豪雪地帯である栃窪で、4～5mの高さまで積もった雪を除去する「雪掘り」（栃窪では「雪を掻く」ではなく「雪を掘る」という）、雪国ならではの生活体験、また、地元の方々との交流を通し、持続可能な社会、本当の豊かさなどについて学習しました。「RSL-2」で初めて訪れた栃窪は、豪雪地帯ゆえの生活の大変さもありましたが、広い空と太陽があり、きれいな水と美味しい空気が優しい人々のまわりに流れていました。壮大な自然が人や食べ物を豊かにしてくれている、そんな栃窪に大きな魅力を感じました。

「RSL-2」の授業での経験から、栃窪のように人と人とお互いに関心を持って暮らし、安心・安全な食事をとり、自然とともに生きる、それがお金には変えられない「本質的な豊かな暮らし」であると考えました。私たちが暮らす都市部ではお金を払えば何でも手に入れることができ、結果と利便性を追求した生活が日常的です。そのような社会を栃窪のような暮らしにすることは出来ません。また、都市部での暮らしを否定するわけでもありません。しかし、栃窪での人と人とのつながりや、食に対する考え方を知ることが、都市部で生じている様々な問題を解決する糸口になるのではないかと思います。反対に、農村部の暮らしに都市部の人がかかわることで、少子高齢化等の農村部が抱える課題の解消につながるかもしれません。このように都市部と農村部がお互いに補い合う関係を築くことが、それぞれの暮らしの新たな「価値」を見出すことにつながるのではない



稲刈り前に栃窪を再訪

でしょうか。また、そういった関係が日本の社会に普及したらどんなに素晴らしいでしょう。そのような考えから、ポール・ラッシュ博士記念奨学金を利用して「RSL-2」の履修者9名とともに「立教×栃窪プロジェクト」の活動を始めました。

実際には、この10月に開催されたホームカミングデーで栃窪のお米を紹介・販売することを目指し、5月からほぼ毎月栃窪を訪れました。ここでいう「栃窪のお米」というのは、少子高齢化により田んぼの管理が行き届かず、耕作放棄地化してしまった田んぼを一括管理し、昔ながらの手法で無農薬・減農薬で生産しているパノラマ農産のお米、「パノラマ米」です。雪掘りでお世話になった方々と交流しながら、パノラマ農産の方とホームカミングデーに向けた打ち合わせを進めていきました。集落に生える山菜採りや、田植え・稲刈りのイベントにも参加させていただき、積雪時以外の栃窪の暮らしや、安心・安全な食事についてより多くのことを学ぶことができました。本番のホームカミングデーでは、パノラマ米を通して、栃窪の魅力を知ってほしい、そして「豊かさ」について自分の価値観を見つめなおしてほしい、まさに、「立教×栃窪プロジェクト」の目標としたテーマの実現を目指して、パノラマ米の紹介・販売を行いました。当日はパノラマ農産の社長も来てくださり、用意したお米も完売することができました。

「RSL-2」の授業を通じて、今までの大学生活では出会うことのない方々とかかわり、様々な価値観に触れることができたことが一番の学びであったと思っています。奨学金は2015年度で終わってしまっていますが、今後もどういった形であれ、栃窪とかかわり続け、栃窪の魅力から学ぶ「豊かさ」を伝えていきたいと思っています。

あかぎ もえ



ホームカミングデーでの販売の様子